第九たいむず号外

第8回海外公演特集　解団式　No.12　2015.12.5　担当　GON

ホームページ：www.takasaki9.com　担当者メアド：osatokazu1944@able.ocn.ne.jp
〒370-0863　高崎市聖石町9-13（赤羽方）　TEL/FAX：027-322-0996　緊急 090-4157-3109（大里）

1ヶ月前の今日は、トリアーの街でデモンストレーションをし、夜はゲネプロ。明日の本番に備えました。あれから1ヶ月、トリアーの音楽仲間からお便りをいただきました。大成功をぐっと噛みしめ、号外は本当に最後です。

◆「トゥリアー・フォルクスフロイント新聞」（11／8付）

”ベートーヴェンを通しての民族間相互理解　そして　ある有望なデビュー”

ヴォウター・パドベルクとトゥリアー・フィルハーモニックが日本のコーラスと共に一劇場を出会いの場として一熱狂させた。歓喜とブラヴォーの喝采を持って聴衆が日本の高崎コーラスと市フィルハーモニック・オーケストラの共同出演を祝った。独日協会首唱で、幾つかの日本の歌もプログラムに取り入れてのベートーヴェンの第九のコンサートであった。

650席全て満席の金曜日の夜に、劇場で一つのクラシック・コンサートの意味合いを期待していた者は、的が外れていた事であろう。その夜には余りにも大きな平安と情感が刻まれていた。独日協会の招待を受けてやってきた高崎コーラスは、民族間相互理解の一つの意思表示をした事によって、その名の由来する高崎市（東京の北 100km 程にある）に栄誉をもたらしたのである。

トゥリアー劇場もフィルハーモニック・オーケストラ、幾人かのオペラ・コーラスの団員、ソリスト陣、そして80数人の日本の合唱団との感銘深い舞台景観を作る事によって、この大きなイヴェントを支えた。

プログラムには、最終楽章に、当時としては革新的な歌手陣とコーラスを擁する、ベートーヴェンの1824年作の第九交響曲があった。誰もが知るところのフリードリッヒ・シラーの”喜びへの頌歌”にベートーヴェンが作曲したものだ。

“Freude Schoener Goetter Funken”とコーラスが熱情を持って歌うこの歌は、日本では密かな国歌として、大きな好意を持って享受されている、因みにヨーロッパではこの曲は1985年に、ヨーロッパ共同体の賛歌として宣託されている。

まずは日本からのゲストは我々の耳には不慣れなリズムや強弱を伴った、しかし魅惑的な彼らの故郷からの五つの歌を披露してくれた。それからオーケストラと、この夜にベートーヴェンの第九をもって劇場の第一指揮者としてのデビューを飾るヴォウター・パドベルクの登場である。最初の三楽章を、このオランダ人はオーケストラと、事の他繊細に仕上げたようで、そして明らかに彼と楽団員との相性も良好なように見受けられた。パドベルクは第四楽章にはオーケストラの響きも、更に強制された繊細さが効果を表すようなライン（導線）を見出した様に見受けられる。それは威厳に満ちたフィナーレと全てのアンサンブルと聴衆の圧倒的な喜びを少しも損なう事なく、熱狂へと導いた。

“Seid umschlungen,milionen” と感情を込めて歌うコーラス、そして堂々たるソリスト陣（チェリ・ウイリアムス：メゾ・ソプラノ、マルティン・ミューレ：テノール、クリスチャン・ズィスト：バス、そして同じく劇場の新メンバーとしてデビューしたソプラノのベルナデッテ・フライツ）が納得のいく歌唱を聴かせた。スタンディング・オーヴェイションと歓喜のブラヴォーがその報酬であった。

その後にホワイエで全ての参加者によって催されたレセプションはもっとも素晴しいもので、劇場が相互理解の出会いの場所である事を証明するものであった。

（翻訳：トリアー交響楽団オーボエ奏者　中山　聡さん）

◆ 赤羽先生へのインタビュー記事！トリアー劇場ブログ

”我々について何を報告されますか？” ー赤羽洋子女史とのインタビュー”

１１月６日に日本の高崎コーラスが、私たちのフィルハーモニック・オーケストラと共にベートーヴェンの第九を演奏した。最後の音の余韻が消え去るや否や、全ての聴衆と演奏に携わった者が、この公演は“ある一つのコンサート”以上の物で有る事を確信していた。ここで、音楽が全ての人の世界共通語として、また劇場が相互理解の出会いの場としての役割を果たす事の出来る事を証明した。合唱団指揮の赤羽洋子女史が公演後のホワイエでのレセプションで短いながらもインタビューに通訳入りで応じてくれた。

テアトゥリアー（以下テア）：高崎コーラスはいつから存在しますか？

赤羽洋子（以下赤羽）：４２年前からでございます。“歓喜に寄す”を専門に歌っております。ドイツではハイデルベルク、ニュールンベルク、に次いで三度目の訪問です。その他、ポーランド、リトアニア、スペイン等でも公演を行っております。

テア：今回の公演での満足度は？

赤羽：私たちはトゥリアー市フィルハーモニック・オーケストラと共演できた事を幸運に思っています。その為にわざわざ日本からここへ来た事が報われた思いです。とりわけ、ヴォウター・パドベルク氏との共演を楽しみにしておりました。彼は若いですが、績麗なインテリジェンスなスタイルを持っていると思います。また、とりわけ、彼のトゥリアーでのデビュー指揮に御一緒出来た事も幸運でした。

テア：ご帰国の際はどのようにしてトゥリアーの人達について報告されますか？

赤羽：トゥリアーはとても美しい街です。街には沢山の観光客と活気に満ちたお店があふれています。旅の前には、トリアーは小さくて静かな街、だと聞いておりましたが、私たちが体験したのは彩り豊かで刺激に満ちた街でした。 **（翻訳：トリアー交響楽団オーボエ奏者　中山　聡さん）**

◆トリアーオーケストラの皆さんよりのメッセージ

★高崎合唱団と独日協会の皆様に、素晴らしいコンサート、パーティー、プレゼントを心から感謝します。とても楽しく、盛り上がりました。　**（オーケストラ代表 Ursula Heckmann より）**

★「鳥肌」「センセーショナル」「トリアーでこのような観客の反応を経験したことがありません」熱狂的な反応は、トリアー劇場でこの華麗な夜に添えられました。日本の高崎合唱団と一緒に、フィルハーモニー管弦楽団の演奏は、スタンディングオベーションを起こしました。**（Facebook 記事より）**

★ベートーヴェン第九の後も、極東からのお客様は、オープンで友好的に私たちを魅了しました。合唱団は、今日コンサートの指揮者としてデビューした、第一カペルマイスターWouter Padberg 氏に、特に感謝しました。劇場ロビーにて、彼に最後に日本民謡が歌われました。**（Facebook 記事より）**

★高崎合唱団の皆様、第九コンサートの御成功、心よりお祝い申し上げます！
演奏会後もオケの仲間や友人、知人よりお褒めの言葉を沢山いただいております。
また、お荷物の多い中、私たちの為にも沢山の日本の食糧品を携えて来ていただいて、本当に有難うございました。
皆様のご健康、そして合唱団の益々のご発展を心より祈念しております。

オーケストラ日本人一同

オーボエ：　中山　聡
ヴァイオリン：松本佳奈子　/
粥川彩子
ヴィオラ：　木田佳代
チェロ：　植村葉夏

トリアーオーケストラ Facebook 写真

プロカメラマン”VINCENZOLAERA"氏写真

ボン・ベートーベン像前”全員写真（全員はこれ 1 枚です）

第8回海外公演inドイツ・トリアー記念誌予告

ソプラノ松島聖子さんを委員長とする「記念誌編集委員会」が活動しております。

旅行各班から選出いただいた、記者さんに旅行記事は担当して頂いておりますが、素晴らしく、大成功だった旅行を終えての**感想の投稿もお受けしたいと思います**。

以下の要領で、関連写真なども添え、大里編集委員まで投稿下さい。

＜投稿要領＞

◎内容：今回演奏旅行の感想・エピソードなど。字数は500～800字、写真は1，2枚。

◎期限：1月の歌い初めまで（1月7日）

◎提出方法：出来れば、大里（osatokazu1944@able.ocn.ne.jp)宛メール、又はメールに原稿添付。
メールできない方は、原稿用紙に横書きで手渡し、又は郵送（高崎市菊地町 262-5　大里和熙）

≪記者さんへお願い≫

記者さんへ、あらかじめお願いの担当箇所原稿提出は、今年の最後の練習日（12月17日）までに大里迄届けて下さい。

＜発刊予定＞

来年、2月中に発刊の予定にしています。団の運営委員会で協議し、出来たらこれまでのように、「記念誌発行パーティー」を考えたいと思います。

よろしくご協力、ご理解をお願い致します。

第8回海外公演 in ドイツ・トリアー記念誌編集委員会
委員会委員長　松島聖子
後見人　大里和熙